

自然薯掘り藪の匂ひを持ち帰る 〔板谷峠〕  
 山晴れに魚板の音や懸大根 〔山晴〕  
 赤彦の家に一樹の冬柏 〔板谷峠〕  
 成木責日照雨に濡れて終りけり 〔寒靄〕  
 雪の夜の燭炎えたたす舞の袖 〔板谷峠〕  
 青饅や「ボルガ」に午後の馴染客 〔暁紅〕  
 桜鯛息のかぎりに跳ねてをり 〔随処〕  
 柏餅おのづと皿に葉を開く 〔山海抄〕  
 峠より日の濃くなれり紅の花 〔板谷峠〕  
 蓴舟沼底擦つて戻りけり 〔高幡〕  
 西瓜売り厚き筵をひろげけり 〔山晴〕  
 子別れの鴉木の枝散らばしぬ 〔山海抄〕  
 遠野人燈を低くして茸売る 〔随処〕  
 鶉ゐて野寺いよいよ枯深し 〔暁紅〕  
 大鱈を秤る背筋を伸ばしけり 〔山晴〕

### 盤水俳句への講評

俳壇では、皆川盤水の俳句や句集に対していろいろな先生方が講評をされています。その中で、先生と親交の厚かった方の一人、石原八束氏の文章を一例として転載させて頂き、参考としたいと思います。入手できる範囲で多くの講評を読んで頂ければ、さらに盤水俳句の世界を深く理解できるのではないのでしょうか。

### 啄木の小学校に秋蛙

### 皆川盤水

昭和五十九年作『寒靄』所収

「なつかしい日本」の発掘ということが、『寒靄』の著者皆川盤水俳句の詩的テーマであるう、とそう長い間私は考え続けて来た。はばかりながら言えば、私もまた「なつかしい日本」の相やルーツを求めて全国くまなく歩き廻ってきた一人である。そのためであるうか、もう三十年来この著者とはウマが合って親しくさせてもらっている。『寒靄』についても、〈土用蜆蓮の葉に盛り売つてをり〉とかの秀品については、この句集刊行直後に、すでにそくばくの鑑賞批評文を私は綴っている。その他〈谷川に鶯の声や柚子日和〉〈杉の間にひかる粉雪や達磨市〉〈作務僧の腰手拭や茄子の花〉〈床下を鶏出て来たり初桜〉〈鶺鴒の番ひ来てゐる昆布小屋〉などいずれも「なつかしい日本」の姿を捉えて、素朴で慈味な詩情を表白しているのに感銘する。とくにこれらの句の下五の据え方の見事さはどうだろう。余りの見事さに一句が下五によって逆転の効果をあげている鮮やかさに注目しておきたい。上掲の「秋蛙」の句も同様な手法によって歌人啄木像の原点を捉えているのではないか。

石原八束著『胸中山河 秀句を拾う』（飯塚書店）